

《研究余滴》イギリス自然文学研究事始め

The Beginning of My Study of English Nature Writing

門井 昭夫

KADOI Akio

Abstract: I had been engaged in editorial work of encyclopedias for more than ten years at a publishing house in Jimbocho, Tokyo. I was in charge of the section of natural science including natural history. It was through this editorial work that I had come to be interested in English nature writing, especially Gilbert White's *The Natural History of Selborne* (1789).

White was an eager questioner, a devoted chronicler, an accurate reporter, a tolerant and humorous commentator. *The Natural History* displays his affectionate and detailed observations of wildlife and nature, and his love of the picturesque in landscape.

The late Dr. Yasugi Ryuichi, a biologist and leading scholar in the history of science, and one of the writers for our encyclopedias, encouraged me to study English nature writing.

White loved James Thomson of *The Seasons* (1726-30) very much, calling Thomson "the poet of nature," in *The Natural History*. That attracted my interest in the poet, and consequently I have ever written two essays on the poet.

Key words: Gilbert White, *The Natural History of Selborne*, natural history, English nature writing, Dr. Yasugi Ryuichi.

ギルバート・ホワイト、セルボーン博物誌、博物学、イギリス自然文学、八杉龍一博士

かつて神保町の出版社で10年以上もの間、百科事典の編集の仕事に携わった。20代半ばで百科事典の部署に異動するよう話があった時、浅学の自分に百科事典の仕事など出来るかと思い、大いに躊躇ったのだが、「将来的に君のためになるから」と言われて結局は移ることになった。我が国が高度成長期に入ろうとする1960年代はマルティ・ヴォリュームの百科事典や全集物の出版が盛んで、百科事典も一つの企画が終ると、また次の新しいものを出すという具合であった。電子ブックなどいうものがまだ存在しない時代の話である。

百科事典の仕事をする中で、いろいろな事を学んだ。大学での専攻科目である英語英文

学以外の様々な分野の知識を吸収することができたのは幸福なことであった。そういう知識は英語を読む時に大いに助けとなる。内容がよく解らない英文を文字面だけで読むと、とんだ誤解をする。百科事典編集部での担当が自然科学部門、特に動植物を始めとする生物、天文、気象、地学などの自然界に関する分野の担当編集長であったことは、いろいろな意味でその後の自分の生き方に影響することになる。編集の参考資料として欧米で出版された図鑑の類を見る機会が多くあった。とりわけイギリスの出版社の図鑑には優れたものがあつた。そうしたものを見ることで各種の鳥の英語名を覚えた。当時の英和辞典の鳥名の訳語は不十分なものであつたし、『英語歳時記』（研究社）も事情は同様であつた。

ロマン派の詩人には鳥を詠んだ詩が種々あるが、中には現在の鳥名とは異なっているものがあつて、誤解してしまうことがある。例えば、ワーズワスに *The Green Linnet* という作品がある。この詩は光溢れる陽春五月の日に、果樹園でアトリ科のアオカワラヒワという小鳥が白い花を咲かせる果樹の枝葉の間をわが世の春を寿ぐように飛び回り、囀る様子を詠んだものだが、この鳥を green の linnet (ムネアカヒワ) と解してしまうと、おかしなことになってしまう。なぜならばムネアカヒワはその名の示すように胸部と頭頂が赤く、アオカワラヒワは全体が黄色味を帯びた緑色をしており、第 2 スタンザに in thy green array (緑の衣をまとい) とあるからである。この鳥は現在 greenfinch と呼ばれているので、誤解を招くことはないが、ワーズワスの時代の呼び名はいかにもミスリーディングである。せめて green-linnet とハイフンでつながっていれば助かるのだがと思う。

鳥に関連してはその後、ロマン派その他の詩を読んで、「カッコウの詩と詩人」（『英米文学評論』1984 年春季号）、「雲雀の詩—イマジネーションはどう飛翔したか」（同上 1987 年夏季号）、「ナイチンゲールの詩」（同上 1993 年冬季号）というような論考を書いた。

こうしてイギリスの鳥に親しんでくると、ギルバート・ホワイトの『セルボーン博物誌』の内容にいつそう興味が湧く。ホワイトは広く自然界の植物、動物、魚、昆虫にも関心を持っていたが、もっとも強い関心を抱いていたのが鳥類である。勤め先の教会に馬に乗って行く道すがら自然観察を行い、メモを取るなどした。特にツバメの渡りには大きな関心を払い、毎年を渡来と渡去の時期、遅くまで渡去しないで越冬するツバメについて考察するなど、その強い関心ぶりがよく解る。この博物誌を読んでイギリスの自然文学を自分の研究分野にしようと考えようになったのは 30 代始めのことである。

『セルボーン博物誌』にはラテン語、ギリシア語などが出てき、調べがつかず困る場合があつた。百科事典の仕事でお訪ねする機会の多かった生物学者で科学史家の八杉龍一先生にそんな話をしたところ、戦前に出版された研究社の英文学叢書に収められている市河三喜編の注釈書を幸いにも頂戴することができた。八杉先生は博物学、博物誌にも深い関心を持っておられた。八杉先生には自然の探究における博物学の意義の再認識を唱えたアドルフ・ポルトマンというスイスの生物学者についても教えていただくなど、さまざまに

蒙を啓いて下さったことは有難いことであった。その後、先生にはイギリス自然文学関係の論考をお送りすると、お読みくださって必ずご返事を下さった。中でも、ギルバート・ホワイトと自然詩人ジェイムズ・トムソンについて書いた「ジェイムズ・トムソンの『四季』とギルバート・ホワイト」については、ご著書の『生物学の歴史』上下（NHK出版、1984）の中で言及して下さった。また、「カッコウの詩と詩人」という拙論については、『アニマ』（1985年1月号）にお書きになった「ナチュラル・ヒストリーはなぜ興隆したか」という論考冒頭の18世紀イギリスの項で少なからず引用して下さった。

『セルボーン博物誌』については各種のエディションをイギリスの古書店や神保町の古書店で買うことができた。とりわけ Thomas Bell 編のもの2巻（1877）は、ホワイトの各種の書簡（当時ジブラルタルにいた弟の John White を始めとする家族宛のものなど）のほか、支出帳、ホワイトの行った説教も幾つか収録されており、興味深い。Bowdler Sharpe 編のもの2巻（1900）は、出版された『セルボーン』では省略されているが、デインズ・バリングトン、トマス・ペナントの二人にそれぞれ宛てた元の書簡にはあった部分が収められており、貴重である。大小の図版が豊富に掲載されているのも有用である。これは緑色の半革角革装のきれいな本なので、神保町の古書店で非常に高い値がついており、買おうか買まいかと迷った末に、月並な言い方をすれば清水の舞台から飛び下りるつもりで買うことに決め、ボーナスが出たら買いにくるからと言ってリザーヴしておいてもらったのだ。1974年（昭和49年）夏のことである。

このほか、ギルバート・ホワイトに関する各種の参考資料も次第に入手することができ、整ってきたので、後はこれらの資料をよく読んで勉強すればよいという状態になった。そうして、友人に誘われて入った「英米文学研究会」の会誌に毎年1回寄稿するようになり、出版社を定年退職してからは再就職した大学の紀要に論文を寄せた。

ホワイトが最も関心を抱いて観察したのは渡り鳥の渡来と渡去であることは先にも記したが、年によって異なるその時期の早さ、遅さに大きく関わる気象条件（気温、風、天候）についてはバリングトンから貰った『自然観察日誌』（*Naturalist's Journal*）に毎日記録した。この日誌が母体となって『セルボーン博物誌』が後に生まれることになる。勤勉な園芸家であったホワイトが花卉、野菜、果樹の栽培について日々の作業内容を1751年から1767年まで記録したのは『園芸日誌』（*Garden Kalendar*）であった。居所ウェイクス荘（Wakes）の屋敷内には菜園、果樹園、外庭園、小庭園ほかの広い庭園部分があり、菜園では何月何日にキュウリの苗を植えたとか、何の花の種子を播き、どんな肥料を施し、その生育状況はどうであったかなどを詳しく記録した。

作物を育てる立場から当然のこととして、ホワイトは気象には大きな関心を抱き、この『園芸日誌』には天気のことが見出しの多くの部分を占めており、セルボーンの微気候を

周辺の地方、西ヨーロッパ気候型と比較したりしている。気象のみならず、ナイチンゲールの初鳴き、カヤネズミのことも記されていて、『園芸日誌』はホワイトの自然観察の最初の記録として重要である。

『園芸日誌』とは別に 1766 年から 1 年間書かれたのが『セルボーン植物日誌』(*Flora Selborniensis*) である。この日誌は 1766 年の花暦ではあるけれども、植物とともに渡り鳥の渡来と渡去、昆虫の去来、および爬虫類の初見という同じ時に起こる出来事を幾つか一緒にして記すと初めに断わっている。したがって、この花暦はセルボーンにおける季節の生物暦ということになる。ホワイトの植物への関心は『園芸日誌』ではもっぱら実用性のある栽培植物にあり、『セルボーン植物日誌』では野生植物への関心が示された。分類に関してホワイトは、植物はジョン・レイの分類法に従い、鳥類はフランシス・ウィラビーの『鳥学』に従った。昆虫はレイの『昆虫誌』に、また爬虫類は『四足動物要綱』によった。これは当時、リンネの分類法がイギリスに入ってきており、従来の分類法との関係で問題が生じていたことを窺わせ、典拠を示すことで混乱を避けることを意図したものと考えられる。

『セルボーン博物誌』には数種の翻訳がある。しかし、その一つに西谷退三訳があることはあまり知られていない。西谷退三(1886-1957)は高知県の^{さかわ}佐川村(現、佐川町)に生まれ、札幌農学校に進んだが家庭の事情で予科二年で中退し、帰郷した。ちなみに佐川は植物学者牧野富太郎の出身地である。在学中に植物学者三好学の講演を聴いて『セルボーン』の魅力を知り、家業の薬種問屋を継いでいたが、後にその経営を叔父に譲り、佐川の西南部にある西谷に隠棲して読書と『セルボーン』の翻訳に明け暮れる日々を過ごす。西谷退三はペンネーム(隠棲地にちなむ)で、本名は竹村源兵衛という。

『セルボーン』の翻訳は推敲に推敲を重ね、出てくる動植物に関しては正確を期した。その間 1923 から 25 年(1 月帰国)まで欧米に遊学、アメリカではソローゆかりのコンコードを訪れるなど、各地を旅行した。1 年 2 か月後にイギリスに渡り、セルボーン村を数回訪れた。米英滞在中に博物学書約 1,500 冊を収集した。その中には『セルボーン』の刊本 60 余種計 80 数冊が含まれる。西谷のこれらの収集書は佐川町にある^{せいざん}青山文庫に西谷文庫として所蔵されている。1961 年から 3 年がかりで当時高知大学教授であった八波直則氏が整理を行った。そのことを知って 1978 年の 9 月に青山文庫を訪れ、見事な西谷コレクションを感激しながら手にとって見、『セルボーン』の翻訳に精魂を傾け、生涯を捧げた人がいたということに感動を覚えた。西谷退三訳の『セルボーン』は西谷の病没(1958)した翌年に非売品の私家版として 200 部が養徳社より出版され、友人、知己に配られた。1961 年には博友社から出版され、1992 年に八坂書房から復刊された。

(received Oct. 2015)